

○ 本校の概要

「御園中プライド」を合い言葉に「挨拶と笑顔が自慢」「思いやりの心をもつ」「保護者・地域の信頼に応える」「教職員の創意の発揮と協力体制の充実」の教育活動を推進する。

○ 自己評価及び学校関係者評価の結果の概要と改善策

大項目	目標	取組内容	取組指標	取組評価	目標に対する成果指標	成果評価	これまでの取組 今後の改善策	学校関係者記入欄	
								評価 人数	コメント
プラン1 未来社会を創造的に生きる子供の育成	コミュニケーション能力、情報活用能力、ともに生きる力等、これからの社会の変化に対応する子どもたちの力を自信を身に付けます。	外国語教育指導員を効果的に活用し、外国の方々とコミュニケーション能力の育成等を図っている。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	おおむねできたと回答する教員が85%以上であった。	4	【これまでの取組】 ・年度当初、学校経営方針にコミュニケーション能力・情報活用能力の定着を定め、全ての教育活動で取り組ませ実践することを目標とした。 ・定期考査ごとに教科部会をもち学習内容の進捗状況を確認させた。 ・ICT機器をより効果的に授業に活用するためにICT教育推進リーダーを中心にICT支援員を活用し全教員に情報を提供し意欲的な活用を促した。 ・人権感覚を身につけるための校内研修を行い全教員に人権感覚の重要性を徹底した。	A 7 B 2 C 0 D 0	・土曜教室にタブレットを持参して生徒複数人で話し合う場面が見られ、積極的に活用され始めていることを実感している。 ・話し合い、グループ活動の過程を重視し特定の生徒に偏らないようにできること効果増大すると考えます。 ・ICT活用はあくまでツールでありリミット、デメリットについても意識させてほしいと思います。 ・体力の基として食との関係についても体感できると良いかと思う。 ・学校でのICT活用については、積極的に取り組んで頂けると感じます。ただ家庭では、なかなか活用されていないため、学校でのタブレット活用、家庭との連絡方法など保護者向けのタブレット講習会などもあると良いと思います。子どもがどのように学校でタブレットを活用しているのか、また学校と家庭間でもICTを活用している状況がつかれば良いのではないかと思います。 ・教職員の意識改革は学校の質の向上につながるの引き続き実践して欲しい。 ・将来を担う子どもたちには個々の考えを相手に伝達できる論理的思考を身につけてほしいと願っている。
		理論的、科学的な思考力の育成を目指し、「おたのみのづくり」を生かした体験活動や理数授業等を実施する。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	2	おおむねできたと回答する教員が75%以上であった。	3	【今後の改善策】 ・話し合い活動やグループ活動等の授業形態が少しずつ行えるようになったのでグループワークや発表などの授業を徐々に取り入れて生徒の能力向上に努める。 ・校内研修会や論理的、科学的な思考力を育成するための具体的な指導方法を研修し各教科で実践していく。 ・全教科でICT支援員の協力を得ながらタブレットやICT機器を活用した授業を充実させ学力向上に結びつけるような活用方法を研修していく。 ・体力テストの結果から持久力と瞬発力が比較的劣っているため毎回の体育の授業の最初に一定時間の走り込みを行うように計画する。		
		学力の定着と学ぶ意欲の伸長を目指し、ICT機器を活用した授業を実施する。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	3	おおむねできたと回答する教員が50%以上であった。	2	【今後の改善策】 ・少人数授業における指導の充実を図り基礎学力の向上を徹底させる。 ・各学年とも学力下位層の生徒に対し、放課後補習と土曜教室への参加を促し定着できるように指導する。 ・各教科主任に授業改善推進プランに沿った授業が行われているかを報告させ遅れている教科は指導を入れていく。		
		他者の人権を尊重する人権教育の推進を目指し、人権教育資料等を活用した授業を実施する。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	2	おおむねできたと回答する教員が50%未満であった。	1			
プラン2 学力の向上	児童・生徒一人ひとりの学ぶ意欲を高め、確かな学力を定着させます。	学習カルテを基に児童・生徒と面談し、一人ひとりの学習のつまづきや学習方法について、指導する。	4:対象となる全学級(全教員)で行った。 3:80%以上で行った。 2:60%以上で行った。 1:60%未満であった。	3	生徒アンケートで授業中は、学習に集中して取り組んでいるが80%以上である。	4	【これまでの取組】 ・数学と英語は習熟度別少人数指導で生徒の学力に応じた指導により低学力の生徒の力がつきはじめた。 ・学習補助員による放課後補習と土曜教室を定期的に行い学力下位層を中心に基礎学力の定着を図れた。 ・年2回の三者面談で生徒個々の学習のつまづきを確認し生徒に合った学習方法を生徒保護者に提案し実践させた。	A 6 B 3 C 0 D 0	・土曜教室では毎回講師からのコメントを基に「講師の声掛け」の共有等、みその学校サポートでできることを検討し続けている。例えば個別の発音指導を提案したところでも積極的に受ける生徒もいる自主性が高まっていると感じた。 ・なぜ学ぶのか、どんなところが魅力的なのかを感じたことで好きになるきっかけにならないかと思ひます。 ・自分もそつたか、何となく理解したつもりになり本当の理解ができていない場合が多かったと思う。 ・放課後補習、土曜教室については、部活動との兼ね合いも含め、先生方とサポートの方々の連携が必要ではないかと思ひました。 ・少人数授業を充実させていくことで生徒の学習意欲が増すことを期待している。
		算数・数学到達度をステップ学習チェックシートで児童・生徒、保護者に知らせる。	4:学期に2～3回知らせた。 3:学期毎に知らせた。 2:年度間に1回は知らせた。 1:お知らせできなかった。	3	生徒アンケートで授業中は、学習に集中して取り組んでいるが75%以上である。	3	【今後の改善策】 ・少人数授業における指導の充実を図り基礎学力の向上を徹底させる。 ・各学年とも学力下位層の生徒に対し、放課後補習と土曜教室への参加を促し定着できるように指導する。 ・各教科主任に授業改善推進プランに沿った授業が行われているかを報告させ遅れている教科は指導を入れていく。		
		学習補助員等による算数・数学・英語の補習を実施する。	4:対象児童・生徒への出席を全教員が働きかけた。 3:80%以上の教員が働きかけた。 2:60%以上の教員が働きかけた。 1:60%未満であった。	4	生徒アンケートで授業中は、学習に集中して取り組んでいるが50%以上である。	2			
		授業改善推進プランを、授業に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上が回答した。 2:60%以上が回答した。 1:60%未満であった。	4	生徒アンケートで授業中は、学習に集中して取り組んでいるが50%未満である。	1			
プラン3 豊かな心の育成	子ども一人ひとりの正義感や自己肯定感、自己有用感などを高めるとともに、自他の生命を尊重する心を育成するなど、未来への希望に満ちた豊かな心をはぐくみます。	小中一貫による教育の視点に立った生活指導の充実により、社会のルールや学校のきまりなどを守ろうとする意識を高める。	4:全教員が行った。 3:80%以上の教員が行った。 2:60%以上の教員が行った。 1:60%未満であった。	4	生徒アンケートで「学校生活が楽しい」80%以上である。	4	【これまでの取組】 ・小中一貫教育の充実を図り小学校からの生徒の家庭環境を含めた情報交換等を密にし生徒指導に役立てた。 ・年度当初の職員会議で要配慮・要支援の生徒の共通理解を図り全教員で指導上の注意等を確認した。 ・生徒指導については生活指導部を中心に全教員が共通理解と共通実践で対応していくことを心がけた。 ・全教員が道徳授業の研修に努め、授業は学年学級の枠を越え全教員で行い全教育活動において実践することを確認した。 ・「いじめ防止基本方針」を全教員に周知し全教員で全生徒をみていくことを徹底し、年2回の「ふれあい月間」のアンケートのための早期発見と早期解決に努めた。 ・不登校の生徒についてはクラス担任と学年を中心にこまめに連絡を取り合うことを徹底した。登校支援員の方も電話連絡だけでなく定期的な家庭訪問も実施した。	A 7 B 2 C 0 D 0	・土曜教室の様子や生徒アンケートからも与えられた環境で一所懸命に取り組んでいることを把握できて、「自己肯定感」が健全に育っていると、先生は出来栄に不満がなくても、「何かが大切か」について、生徒の理解が深まっていると考えられる。 ・道徳性を高める最も重要な年齢であると感じる。 ・善悪の判断ができる社会性を身につける最終段階でもあるように感じる。認められ認められる機会を多くつくることのできるか努めていきたい。 ・「学校生活が楽しい」と答える生徒が多いのは、安心できて良いことだと思います。しかし、御園中は生徒人数も少ない分、もう少し先生が生徒に寄り添える部分もあるのではないかと思ひます。 ・全教員員一丸となってご尽力されていることは色々な面で活かされるだろうと期待している。
		道徳教育推進教師を講師とした研修や、国、都及び区の資料を活用した授業等を行う等道徳指導充実のための取組を行う。	4:学期に2～3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	3	生徒アンケートで「学校生活が楽しい」75%以上である。	3	【今後の改善策】 ・道徳指導の更なる充実のための研修を今後も続けていく。 ・いじめの早期発見のため日頃から生徒の様子を教師として常にアンテナを高く立上げて生徒を見守っていく。 ・不登校の生徒と保護者とこまめに連絡を取り合うこと、電話だけでなく家庭訪問も定期的に行う。		
		学校生活調査(メンタルヘルスチェック)の結果よりストレス症状のみられる児童・生徒に対して組織的に対応する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	3	生徒アンケートで「学校生活が楽しい」60%未満である。	2			
		学校いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止、早期発見等のための取組を実施する。	4:「組織的対応ができた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	4	生徒アンケートで「学校生活が楽しい」60%未満である。	2			
プラン4 体力の向上と健康の増進	スポーツに親しむ心の育成や、運動習慣の定着による体力の向上など、生涯にわたって健康増進を図る意識の向上をめざします。	「早寝・早起き・朝ごはん」月間の取組等を通して、児童・生徒や保護者に対し、望ましい生活習慣についての意識啓発を行う。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	3	成果が得られたと回答する教員が90%以上であった。	4	【これまでの取組】 ・栄養教諭が各学年で食育の授業を行うとともに昼の放送を使って食に関する情報を生徒に提供し「食育」の推進に努めることができた。 ・全教員が部活動の顧問となり多くの生徒に活動の機会を与え部活動の活性化を図ることができた。 ・今年度コロナ感染予防の万全な体制で運動会を開催し一人の感染者も出なかった。保護者からの評価も高かった。 ・年通信、ホームページ等で地域・保護者に学校の情報や生徒の様子などを発信することができた。	A 8 B 1 C 0 D 0	・劣っている点について対策が練られ表出・共有されていることを評価する。 ・健康を支える「食」の大切さを伝えていく関心を高めることは、心を満たす最大の近道だと思ひます。更なる継続発展をお願いしたい。 ・部活動の活性化効果は大きいと考えている。更なる活性化をお願いしたい。 ・コロナ禍の現在、それぞれの学校の対応の違いなどがニュースになる中、子どもたちを一番に考え運動会、学校行事を積極的に開催していただくことがありがたいです。 ・今年度行事が軒並み中止となる中、運動会を開催して成功させたことは素晴らしい事である。
		給食指導及び教科等における指導を通して、食生活の充実・改善をねらった「食育」を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	4	成果が得られたと回答する教員が60%未満であった。	1			
		体育的行事、部活動、休み時間など様々な機会を通して運動習慣の確立を推進する。	4:全教員で行った。 3:80%以上の教員で行った。 2:60%以上の教員で行った。 1:60%未満であった。	3	成果が得られたと回答する教員が60%未満であった。	1			
		問題行動・不登校問題等にかかわる児童・生徒に関するケース会議等を実施する。	3:必要な事案に対しておこなった会議を実施した。 2:必要な事案に対してあまり会議を実施しなかった。 1:必要な事案に対してほとんど会議を実施せず、組織的に対応をしなかった。	3	生徒アンケートで「学校生活が楽しい」60%未満である。	1			
プラン5 魅力ある教育環境づくり	児童・生徒が安全・安心に学校生活を送るために、教員の指導力向上と良質な教育環境をつくりまします。	授業公開日の授業評価を、その後の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	3	おおむねできたと回答する教員が75%以上であった。	4	【これまでの取組】 ・感染予防策をとり授業公開を実施し、授業改善に行かすことができた。 ・オンラインでの授業実践が行われるようになった。 ・昨年以上に研修会等が行われるようになり授業改善に役立った。	A 7 B 2 C 0 D 0	・与えられた環境で十二分に取り組んでいる。 ・先生方の関係性、子どもたちとの関係性、保護者との関係性は言うまでもなく、どれかが希薄でも生活できないかもしれないが、人間性を高める良質な環境とは言えないと、オンラインでのつながりがあってオンラインを活用できるのではと感じている。 ・このような状況の中、子どもが安全で安心して学校に行けるよう勉強できるのは、教職員の方々のお陰と感謝しております。ありがとうございました。 ・オンライン授業を導入して、実践して、授業形態の多様化を図っているのは、今後の変化に対応できる糧となると思うので評価できる。さらに研修会等を充実させてスキルアップすることに期待している。
		授業改善セミナー等の研修成果を生かし、主任教諭が助言・支援を行う校内研修等を実施しOJTを充実させる。	4:学期に2～3回(年間6回)以上行った。 3:学期に1回(年間3回)以上行った。 2:年度間に1回以上行った。 1:実施しなかった。	3	おおむねできたと回答する教員が65%以上であった。	3			
		各種研究発表会等の研究・研修の成果を、自身の授業改善に生かす。	4:「おおむねできた」と全教員が回答した。 3:80%以上の教員が回答した。 2:60%以上の教員が回答した。 1:60%未満であった。	3	おおむねできたと回答する教員が50%以上であった。	2			
		校内委員会等を確実に実施し、学校における特別支援教育を推進する。	4:月1回以上行った。 3:学期に2～3回行った。 2:学期1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	おおむねできたと回答する教員が50%未満であった。	1			
プラン6 学校・家庭・地域が担う役割	学校・家庭・地域が担う役割に、地域に開かれた教育の実現を目指す。また、相互の連携を深め、子どもを育てる仕組みを作ります。	教育目標・学校経営方針・学校評価等の基本情報、児童・生徒の活動情報等をホームページ等で公開及び更新することにより、積極的に情報を発信する。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2～3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	おおむねできたと回答する教員が80%以上であった。	4	【これまでの取組】 ・公開すべき必要な学校の情報はホームページを活用して発信し定期的に更新にも力を入れている。 ・緊急の情報発信には学校緊急メールを活用して情報の発信をすることができた。 ・地域教育連絡協議会を年3回開催し学校の状況や生徒の姿等を適切に提供し適正な評価を受けることができた。 ・土曜補習教室は例年通り学校支援地域本部と連携し教育活動を実施することができた。	A 6 B 3 C 0 D 0	・地域とのつながりは、時代背景によって大きく変化していくと思うが、将来の社会生活を子どもたちがイメージできるきっかけとして関わる意義は大きいのではないかと感じる。 ・コロナの影響で地域行事ができていない状況です。なかなかこの点に関しては難しいですが、学校と地域の連携にもう少し家庭が保護者が積極的に関わっていく必要を感じました。 ・コロナ禍で当たり前のことが当たり前にできなくなっている状況の中、HP等を活用して情報提供できたことは評価したい。学校側の今後の意欲に対しても期待している。 ・他の箇所は例年より改善が図られているが、地域教育連絡協議会に関してのみ納得できない。過去に教員の前でみその学校サポートを含め地域の取り組みを説明したことがあるが、繰り返し伝えないと理解してもらえないことを認識した。
		地域教育連絡協議会において、児童・生徒の姿等の具体的な資料を作成して、評価に必要な学校の情報を適切に提供し、適正な評価を受けるよう努める。	4:学期に2～3回行った。 3:学期1回以上行った。 2:年1回以上行った。 1:実施しなかった。	4	おおむねできたと回答する教員が60%以上であった。	2			
		学校支援地域本部と連携するなどして、地域力を生かした特色ある教育活動を実施する。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2～3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	おおむねできたと回答する教員が75%以上であった。	3			
		地域教育連絡協議会を年3回開催し学校の状況や生徒の姿等を適切に提供し適正な評価を受けることができた。	4:月1回以上更新した。 3:学期に2～3回更新した。 2:学期1回以上更新した。 1:更新しなかった。	4	おおむねできたと回答する教員が60%未満であった。	1			

○「成果評価」は、各校が4段階で定めた成果指標によって行う。

○記入にあたっては、各学校で取り組んでいる自己評価項目に照らし、該当する項目を取りまとめて行う。

○学校関係者評価の「評価」は、A:自己評価は適切である B:自己評価はおおむね適切である C:自己評価は適切ではない D:評価は不可能である の4点について、評価した人数を記載す